

## 最高学部

### 「創り出す喜びのある生き方を目指して」

渡邊悠子 河原弘太郎

最高学部の美術は、自由学園の一貫教育の集大成として培われた感性と美意識の上に、各々主体性をもって自身の表現・創作を行うことを主眼としています。そのためには幅広い分野の知識を学び、柔軟な発想と創作意欲を生む生地を作らなければなりません。他の学問とも関連する中で、美術が日々の生活や社会に果たす役割を理解し、創作してゆくことが大切であると考えています。(滝沢具幸)

#### I. はじめに

今回のテーマである「創造力は毎日を変える。」とは、自らの力を信じて創造的な力を養い、日々の新たな発見をいのちとすることです。最高学部は、自由学園における一貫教育の終結点です。しかしこれは到達点を示すものではありません。出発のエネルギーです。(最高学部長 渡辺憲司)

#### II. 美術カリキュラムについて

1年次には必修科目として、「美術」を履修し、「立体・陶芸・染織・日本画・油画」の5つの専門的なグループから一つの実技を選択して、作品を制作していきます。

1年次では、各グループとも基礎的な課題で作品を制作し、2年次以降は個人個人の表現をより深めていくための個別制作が中心となっていきます。2年次以降は自由選択科目であり、より深く学びたい学生が履修し、長期的な取り組みを行っています。

また、実技とあわせて芸術に関する理論的な学びも重視し、2016年度からは1年生必修科目として「生活芸術基礎」をスタートさせました。この講義では幅広い芸術の分野で活躍する講師の方々から、様々な切り口で芸術について学んでいきます。

さらに、「西洋美術史」や「基礎造形」、「生活美術」といった発展的な内容の講義も開講し、「技術」と「理論」を両輪として学んでいくことで、より豊かな視点を持ち、創造的な生活をつくっていく力を養うことを目指しています。

#### III. 「美術」の取り組み

学部食堂1階には、「美術」を履修した1年生から4年生までの作品をグループごとに展示しました。どの作品も制作には時間がかかり、地道なものです。一人一人の感性がそれぞれの素材を通してしっかり表現されていたのではないかと思います。

工芸の作品では、生活空間をイメージしながら素材や構造をデザインすることで、自分の求めるものがどうすれば形になるのか学ぶことができました。絵画の作品においては、より個性が引き出された内容で大きな画面に挑む学生も多く、意欲的な空気が感じられました。

それらの中から、いくつかの作品を指導者および学生本人の言葉で紹介します。

##### 【ウールフェルトのポンチョ 染織1年】

まずストールサイズのサンプルを作り、パンチャーで押さえて圧縮することでシルクに原毛が付くことを体験。初めての素材で完成をイメージすることが難しかったので、製作しながらデザインを決めました。

その後、シルクとウール原毛の染色、毛並みを揃えるカーディング作業。フェルトパンチャーを使い、デザインに合わせて前身頃と後ろ身頃に丁寧に原毛を配置しました。面積が広いので自宅に持ち帰り、かなり長い時間をかけて付けました。原毛の重ね方により、質感が面白いものになりました。

脇縫いや袖付け、仕上げをして、いよいよ縮絨(温度と洗剤と圧力で縮める)です。長い制作時間

を積み重ねてきて、最後の失敗出来ない作業です。この縮絨まで、完成が見えないので開いた時には驚きと喜びが溢れました。机の上で作っていたものを仕上げた着用してみると、体に添って立体になり、生き生きとしてきました。そして着ている学生自身が生き生きとしてきました。通りがかった方が、ポンチョを着ている学生を見て、「服は人を変えるのね!」と仰った一言が今回の作品を表していると感じています。(指導 五十嵐富美)

#### 【植物染色によるクッション 染織2年】

植物染色の色を活かしたデザインを考え、試作してから製作を始めた。染織グループでは毎年2～4年生の特別授業で寺村祐子先生(女子美術大学名誉教授)による植物染色を実施。その授業で染めた糸を使用して学園行事の際や応接室等で使用するクッションを製作した。

織物は一般的に抱くイメージとは違って織り始めるまでの工程が長い。細い作業が続くので集中が続かずなかなか出来上がらず心配した。全員出来上がって良かったと言いながら展示をしていた。(指導 田村満恵)

#### 【大機によるラグ《祝福》 染織3年合作】

春の暖かな陽の光と祝福された気持ちを色におこし、期待と不安や感謝の気持ちを表現できるようなラグマットを2人で織る大機で制作しました。段染めをすることによって表現の幅が広がり、色が混ざる面白さを織る過程で感じました。(江村由理子・荻野早奈美)

織るのにかかった時間もさることながら、二人でデザインを決めて糸を染色し、機にかけるまでかなりの時間を要した。7kgにもなる大量の糸を暑い時期にぐつぐつと染色していくことは特に大変であったようだ。この作品は2016年度卒業式にて使用され、ステージの上を彩った。

#### 【ストール《川》 染織4年】

私の卒業研究の対象である「川」について考えながら、糸を選び、織りました。多様な生物が生息し、季節によって変化する川、複雑に色々な要素が混ざりあっている川を、様々な糸を使って表現してみました。(熊田千春)

#### 【コート服地 染織4年】

女子部から10年間続けている裁縫と学部1年から続けている染織の集大成として、コートを作るための服地を織りました。被服学の講義でコートに仕立てる予定です。身につけたときに気持ちが明るくなる色を選びました。(手塚莉生)

#### 【ティーセット 陶芸4年】

ろくろによる成形の後、各パーツを組み立てるかなり難しい技法でしたが、イメージがはっきりした4年生らしい制作でした。(指導 吉田文代)

#### 【壺 陶芸4年】

陶芸を初めて4年目、最後の大作として大物に挑戦しました。手びねりとろくろを組み合わせて、丸びを帯びた曲線を表現することが難しかったです。単調ではなく、複雑な色を出したかったので、釉薬のかけ方や模様の出し方を工夫し、独特な色みを表現しました。特に内側がきれいに黄色と青が入り混ざっています。(加藤小百合)

#### 【本棚《ぼん棚》 立体1年】

一緒に年をとっていきける、長い年月たっても大切に使い続けられる、そんな本棚になるよう、デザインにこだわって制作しました。大正時代のレトロなデザインを参考に、自分の持っている本が並んでいるところや、自分が実際に使っているところを想像しながら作業を進め、時には自分の直感も大切にしました。(大前笑くぼ)

#### 【机《small fish in Counter table》 立体1年】

今住んでいる部屋に入れる為に制作しました。僕の身長が178cmなので、自分のサイズに合わせて少し高めで設計したのですが、ワンルームで邪魔にならないようにシンプルで細身にしました。

アクセントにローズウッドをサイドにつけていますが、小魚は作業中にできたキズを活かしてできたものです。(山口将人)

#### 【絵画《無題》《心の池》 日本画3年】

1年の自由制作から、花と植物を描き続けています。この絵で初めて「見たものをそのまま描く」ことをやめました。それぞれの花の違いを引き出

すことに苦労しました。また、花の持つ強さを表現することを心がけました。(齋藤花)

【絵画《水》(連作：秘密・河・たゆたう日・しぐれ・朝)日本画4年】

如何様(いかよう)にも形を変え、自分の色を持たない。澄み切った透明感と底なしのよどみ。喜び、哀しみ、美しさ、妖しさ、汚濁、冷淡、包容…。あらゆる情景を連想させる水に惹かれた。一瞬の、心の揺らぎが重なった。(村上のどか)

【絵画《2012→2017》100号 油絵4年】

まだ雪の残る3月。海を渡って北海道に行ったのは3年前。絵の中に4年間の私がいる。指差す先は依然として海野向こう側だが、見つめられるようにはなったんじゃないか。暮れなずむ空に大手を振って歩いていく。(近藤紫織)

#### IV. 「基礎造形」の取り組み

2・4年生を対象としたこの講義では、各々が目指す個人の表現をより自由にするために、基礎的な表現力を深めることを目指しています。

自然と向き合い、デッサン・構成・ドローイング・版画などの様々なアプローチを通して、絵画や工芸その他の専門的な表現の礎となる「ものを見る目」と「表現する力」を養います。

今年度は、ひとつの大きな切り株をモチーフとしていくつかの課題を行いました。

じっくりとモチーフに向き合い、ひたすら観察と記述、そして修正を絶え間なく行いながら、モチーフの实在に迫っていく……。5週間ほどの時間を費やしていくうちに、それぞれ画面のなかにひと抱えよりも大きな、切り株のずっしりとした存在感が表現されました。

美術展では、モチーフとなった切り株と学生が実際にイーゼルを置いた位置に作品を並べ、さらに制作過程の記録写真もディスプレイして、木炭紙の上に切り株が立ち現れていく様子を再現しました。

デッサンにひきつづき、ボールペンによる「樹木の細密画」、その細密画をもとにした銅版「樹木のエッチング」も行いました。

切り株の課題から一貫して、樹木をモチーフと

した課題を行うことで、見ることと描くこと、つまり観察する視点と描画する手の連動が鍛えられ、ものを描くように観察する感覚が自然と養われたのではないかと思います。

#### V. 「生活美術」の取り組み

「生活美術」では、「自分らしい美」を模索し、それを形にすることを目標に、2016年度から大きく内容を見直し、より自由な創造の場を目指して、講義をスタートさせました。

各々のもつ視点や価値観を大切に、絵画・工芸・デザイン等、自分に適した方法や媒体を用いて作品を制作し発表してもらいます。そして、その表現自体が、他の教科との研究や活動としても結びつき、美術の枠を超えて創作の可能性が開かれていくことを期待しています。そのために計画からの一連の取り組みを客観的に捉えてることも重視し、ディスカッションやプレゼンテーション、レポート(活動記録)によってより強度の高い作品制作を求めています。

ここでは、講義の枠を超えて取り組まれた作品を本人の言葉で紹介します。

【数理モデルゼミとの研究《Color Ratio of 32 friends—クラスの色彩とその割合—》】

「その人らしさ」ってなんだろう。4年、7年、10年をともに過ごすとお互い「らしさ」を何処に見出すのか。私は「らしさ」を色彩から感じる。持っているもの、着ているもの、性格、雰囲気、環境、好きなもの…理由になるものは多い。「その人らしい色彩」を誰かに聞いても答えは十人十色だけれど、それで良い。全てを合わせた答えこそがその人を表現している要素だから。今回、クラスメイトに48色から色彩イメージのアンケートをとった。そして、48色がそれぞれ全体でどれほどの割合を占めているのかを導き出した。その答えをフェンスヘドデザインとして映し出した。(4年長戸美音里)

【ライフスタイルゼミとの研究《私が目指すライフスタイル—みんなのためのいちかわ体操—》】

私の人生のモットーは、健康に毎日を生きたことです。その健康とは、身体と心のどちらかでは

なく両方が一致している状態のことを指しています。それを実現するためのツールとして、私が自由学園で取り組んできたデンマーク体操を参考に「いちかわ体操」を考案しました。これは誰でも簡単に覚えることができ、短時間で取り組める体操です。この作品は体操の考案、イメージ写真による展示、参加型ワークショップの開催などを含んでいます。(4年 市川ゆり子)

#### 【資源・エネルギーグループとの共同制作《ときめきサイクリング》】

ふみこめばきらめきの世界に行くことができる。そんな自転車を作りました。自転車に取り付けた発電機で作られるパワーを電飾におくり、頑張ってくぐとベレー帽がひかります。普段使っている電気はどこでどのようにして生まれてくるのだろうか。またそれを自分の力で作るのはどれぐらい大変なのだろうか、そんなことに興味を持ったことがこの作品制作のきっかけでした。(3年 荻野早奈美)

#### VI. 準備について

2年生中心にリーダー・副リーダー・各係りを組織し、準備にあたりました。しかし、学生数の減少から1年生にも大幅に係りへ加わってもらい、当日の運営を含め、学部生全員で対応しました。また、準備期間の短縮や体操会までの多忙な予定の中で作業を進めることは負担も多く、皆協力してよく働いていましたが、美術そのものを楽しむ余裕が失われていたことも強く感じました。

#### VI. 美術展を終えて

最高学部の美術では、それぞれの人が自由学園で生活を送るなかで培ってきた感覚を大切に作品づくりをしています。

それは、目の前に作品のための材料や、環境、道具が用意されていて、先生に教えられた通りの方法で制作していく作品づくりとは、まったく正反対の場所にある美術のあり方であり、学生たちにとっても、教える側にとってもとても高度な試みであると、日々感じています。

しかしこの学園で学んできた人々には、そのような主体的な姿勢で作品に取り組むことが、一

番よい方法なのだ、今回の美術工芸展を通してあらためて感じるようになりました。

彼らは、日々暮らすなかで、洪水のように溢れる様々な情報に触れ、そしてこの緑豊かなキャンパスのなかでは、身体・手を動かし互いに協力しながら様々な働き・活動に励んできました。

この独特な環境に育った、今の彼ら・彼女らにしか作れない作品や作品に至るまでの数々の試みが、この美術展、また会期に至るまでの制作期間のなかで、沢山垣間見ることができました。

例えば「生活美術」の学生たちに、「自ら作品のテーマを設定するように」という課題を投げかけたあと、皆随分と苦労してもがきながら、自分と向き合い、作品のテーマと内容を決めていきました。それは答えのない作業であり、どこかで見たようなものに嵌めて完成するものでもなく、学生にとっては真っ暗なトンネルをひとりぼっちで、手探りですすむような心細い時間だったことと思います。

それでも、自分の意思でつくる。自分にとってこの作品は一体なんなのか、もう半歩先へ考えをすすめる、そうやって少しずつ時間をかけながら、作品は生まれていく。インスタントに物をつくることのできる今の時代に、我慢してゆっくりゆっくり物事を考え、少しずつ作品の本当の姿を見つけ出していくという貴重な時間を、美術を通して味わって欲しい。そんな思いを抱きながら、学生たちの様子を見ていました。

制作に向き合う時間は、自分と向き合う孤独な時間ですが、どう過ごすのか。たのしく真剣な時間であればあるほど、これから学園を離れて生活していく人たちの、きっと力強い支えとなってくれるはずだと信じています。

表面的な物をつくる技術はこれからの時代、あっというまに情報技術に置き換えられてゆきます。何も無いところに、何かを生み出していくこと。そうやって獲得した、自分らしい視点は何ものにも代え難い力となって、皆のクリエイティビティを支えてくれることと思います。置き換えることのできない創造性を、この学園でぜひ獲得して欲しいと願っています。





会場風景 | 立体〈学園の木を利用したベンチ・棚・机・小家具、木皿、木彫〉 染織〈ストール、服地〉左奥



立体〈学園の木を利用したスツール〉



染織〈クッション〉 立体〈ベンチ〉



立体〈木彫(リス)〉



染織〈クッション(植物染織)、タピストリー、ラグ〉





染織《祝福》大機によるラグ



染織〈ウールフェルトのポンチョ〉



陶芸〈皿、器、花器〉



陶芸〈壺〉〈スリッパウェア〉《春夏秋冬》陶板



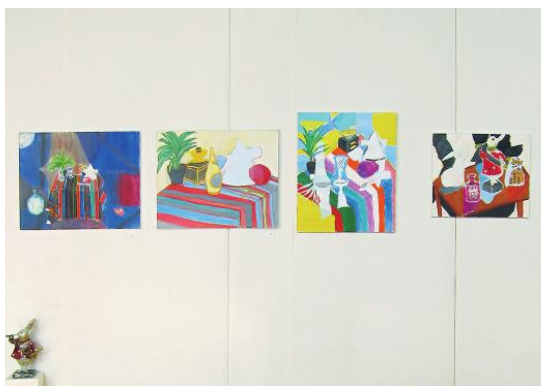
陶芸〈ティーセット〉



陶芸〈ランプ、皿、陶板の時計〉



会場風景 | 絵画 染織〈スツール〉



油絵《静物》



基礎造形〈銅版画、木版画〉 染織〈スツール〉

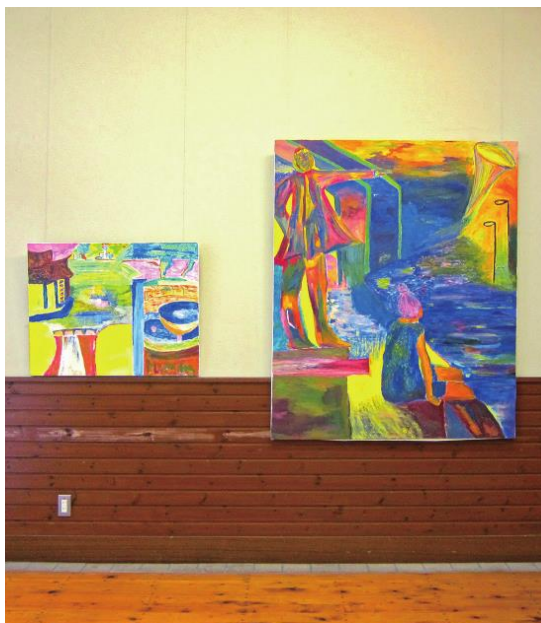


基礎造形《木炭デッサン—切り株》



デザイン《て》シルクスクリーンによる表現





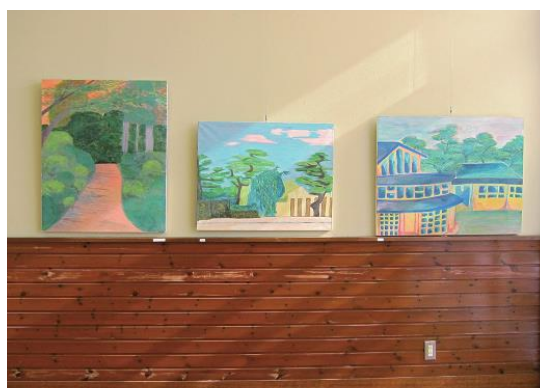
油絵《風景-学園》《2012→2017》



日本画/生活美術《竹々》墨絵のインスタレーション



日本画《静物-ユリ》奥 《心の池》右中央 《無題》右



日本画《風景-学園》



日本画/生活美術《水》連作



日本画/生活美術《水》連作





生活美術/立体《アニマルズ〜〜〜》



生活美術/ライフスタイルゼミ《いちかわ体操》



生活美術《会話の森》糸電話のインスタレーション



生活美術/資源グループ実習《ときめきサイクリング》



生活美術《what you saw in your eyes》イラストレーション



生活美術《今の気持ち》切り絵





生活美術《元気をくれる服》



生活美術《掣肘あるいは解放》ライブペインティング



生活美術《私の世界館》



生活美術《TOKAGE》写真によるコミュニケーション



生活美術/数理モデルゼミ《Colorratio of 32friendsークラスの色彩とその割合》